

イエスを受け入れる者

ヨハネの福音書 13 章 12-20 節

はじめに

先週の説教では、イエス様が弟子たちの足を洗われたという出来事を学びました。イエス様が弟子たちの足を洗うということの意味は、第一に、弟子たちの罪をきよめるという意味がありました。イエス様は、御自身が十字架で血を流して、その血によって弟子たちの罪をきよめるということを、足を洗うという行為を通して示されたのです。今日は、イエス様が弟子たちの足を洗うことのもう一つの意味について学びたいと思います。

1. 「互いに」の大切さ

イエス様は、弟子たちの足を洗われた後、このように言われました。「**主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです**」(13:14-15)。

イエス様はなぜ弟子たちの足を洗われたのか？その一つの意味は、弟子たちに模範を示すためです。イエス様は、弟子たちにも互いに足を洗い合ってほしいと願われたのです。

当時は、立派な靴などなくて、人々はサンダルのようなものを履いていました。そして当時の道は、コンクリートなどで舗装されていませんから、雨が降れば泥だらけだし、そうでなくても土や砂まみれだったでしょう。家畜もたくさん通っていたでしょうから、家畜の糞尿などもそこら中にある衛生的にも問題があったでしょう。ですから当時、人の足を洗うというのは、奴隷が行なうものであったようです。イエス様は、自分が奴隷のようになって弟子たちの足を洗うことによって、弟子たちにも互いに身を低くして、仕え合うことの大切さを教えようとされたのです。

人に仕える、人に奉仕するというのは、大切なことです。私たちクリスチャンは、そのことを今までも色々な場面で教えられています。クリスチャンじゃなくても、人に仕える、人に奉仕することは良い事だと多くの人が直感的に思っています。しかしイエス様は、ただ単に「人に仕えなさい」とか「奉仕しなさい」と言っているのではなく、「互いに」「仕え合いなさい」「互いに」「足を洗い合いなさい」と言っているのです。

「互いに」「仕え合う」ということは、人に仕えるだけでなく、時には人に仕えてもらいなさい、人の世話にもなりなさいということでもあるのです。人の足を洗うだけでなく、時には人に自分の足を洗ってもらいなさいということでもあるのです。

確かに、人に仕えること、人の足を洗うことは大変なことです。自分の身を低くして、人

の汚い部分を受け止めて、徹底的に奉仕することは難しいことです。私たちは元々自己中心的な性質を持っているので、結局は自分が一番可愛いのだと思うのです。そういう中で、自分よりも他の人のことを考えて人に仕える、人の足を洗うということは確かに大変なことです。しかし同時に、人に仕えてもらうこと、人に自分の足を洗ってもらうことも、実は同じくらい大変なことなのではないでしょうか。ある人にとっては、むしろそのほうが難しいかもしれません。

人に足を洗ってもらうということは、人に自分の足を差し出すということです。足というのは、私たちの汚れの象徴です。先ほども言ったように、イエス様の時代の足は、泥まみれ、土や砂まみれ、家畜の糞尿まみれの足です。そういう意味で、人に自分の足を差し出すということは、人に自分の汚い部分を差し出すということです。今でも私たちは、人に自分の足を差し出すのは少し抵抗があります。ある人は、自分の足にコンプレックスがある人もいるでしょう。足が太いとか、毛深いとか、肌が荒れているとか、臭いとか、そういう自分の足を人に差し出せと言われても、なかなかできない、勇気のいることです。そういう意味で、人に自分の足を差し出すということは、人に自分の弱さをさらけ出すということでもあります。結局のところ、人に自分の足を差し出すということは、人に自分の汚さ、弱さをさらけ出して、自分のありのままをさらけ出すということです。

しかし私は、本当の意味で心から喜んで人の足を洗い、人に仕えることができる人は、自分も人に足を差し出すことができる人、自分も人に仕えてもらうことができる人ではないかと思うのです。つまり人に自分の汚さや弱さやありのままをさらけ出し、自分を人に預けることができる人ではないかと思うのです。自分は人に仕えることが専門、人の世話になることなどしない、そういう人はどこかスキがなくて、近づき難くて、仕えてもらう人もどこか緊張してしまうのではないかと思うのです。

2. イエスに足を洗ってもらわなければ

人に自分の弱さやありのままをさらけ出して、人を自分に預けることは難しいことです。ある意味怖くて、勇気のいることです。どうしたら、そのようにできるのでしょうか。それはまず、イエス様の前に、自分の弱さや汚さやありのままをさらけ出して、イエス様に自分を預けることです。イエス様はまず弟子たちの足を洗いました。それから弟子たちに互いに足を洗い合いなさいと言われたのです。イエス様にまず足を洗っていただかなければ、私たちは互いに足を洗い合うことはできないのです。人に自分のありのままをさらけ出すことも、預けることもできないのです。

イエス様は、十字架に架かれる前の日の夜に、弟子たちの足を洗いました。なぜ十字架に架かれる前日に弟子たちの足を洗われたのでしょうか。その第一の意味は、御自身が十字架で流される血によって、弟子たちの罪を洗いきよめることを示すためです。弟子たちの足を洗うということは、イエス様が十字架で流される血によって、弟子たちのすべての罪が洗いきよめるということを示していたのです。「私が明日、十字架であなたたちの罪を洗い

流す」、そういう思いで、イエス様は弟子たちの足を洗われたのです。

そうであるならば私たちも、イエス様に自分の足を差し出さなければなりません。イエス様の前に自分の汚い心も罪も弱さもすべてさらけ出して、「十字架で流された血によって洗いよめてください」と差し出さなければなりません。自分のありのままを差し出して、自分を預けて、それでもイエス様が流してくださった十字架の血によって、すべての罪が赦されている、すべての弱さが受け入れられている、そういう確信に立てた時、私たちは初めて人の前にも、自分をさらけ出すことができるのではないのでしょうか。

もし私たちが、イエス様の十字架によって自分のすべてが赦され、受け入れられているという確信に立たないで、人に自分のありのままをさらけ出したら、どうなるのでしょうか。人は必ずしも自分のありのままを受け止めてくれるわけではありません。もし受け止めてもらえなかった時、大きなショックと傷を受けることになります。しかし、もしイエス様に受け止められていると確信に立っているなら、もう一度立ち上がることができるのです。なぜなら、人が自分を受け止めてくれなくても、イエス様が受け止めてくれるからです。仮に人が自分を受け止めてくれたとしても、イエス様なしにその人に受け止めてもらおうとするなら、その人に依存することになります。そういう関係は、遅かれ早かれ壊れてしまいます。

またもしイエス様に受け止められていると確信に立たないで、人に仕え、奉仕したらどうなるのでしょうか。すべてを完璧にやらなければならないと心に壁を作って、失敗を恐れながら奉仕し、孤独に奉仕することになります。

私たちはまず、イエス様に自分をさらけ出して、十字架に身を預けなければなりません。そこで、自分のありのままが赦され、受け入れられていると信じることができた時、初めて自分を互いに預け合い、信頼し合い、互いに仕え合うことができるのです。

3. その人のうちにイエスを見るなら

これまで色々と、人に仕えてもらうことの大切さ、イエス様に仕えてもらうことの大切さについて話してきましたけれど、私たちはそれだけでなく、自分の身を低くして、人に仕え、人に奉仕し、人の弱さや汚い部分をも受け止めていかなければなりません。それもまた、イエス様が願われたことです。

イエス様は 20 節で、「**わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです**」と言われます。「わたしが遣わす者」とは、イエス様を信じるクリスチャンのことです。私たちがもし教会の兄弟姉妹を受け入れているなら、イエス様を受け入れていることになる、逆に、教会の兄弟姉妹を受け入れていないなら、イエス様を受け入れていないことになると言われるのです。

イエス様はまた、マタイ 25：40 でこう言われました。「**あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです**」。イエス様はここで、「最も小さい者たち」と自分を重ねています。ここでの「最も小さい者たち」というのは、食べ物や飲み物がなくて困っている人、泊る所や着る者がなくて困っている人、病気を抱え

ている人や牢屋に捕らえられている人です。つまり色々な弱さを抱えている人たちです。イエス様はここでは、色々な弱さを抱えている人たちとご自分を重ねて、それらの人たちに対する態度が、そのままイエス様に対する態度になると言われるのです。

新約聖書には、このように私たちの、人への態度が、そのままイエス様又は神様に対する態度になると言われている箇所が、いくつかあります。例えば、Ⅰヨハネ 4：20 には、「**神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません**」とあります。ここではやはり、「クリスチャン」に対する愛が、そのまま神様への愛とも言われています。またマルコ 9：37 には、「**だれでも、このような子どもたちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです**」とあります。ここでは、「子どもたち」を受け入れる態度が、そのままイエス様を受け入れる態度になると言われています。

このように、私たちのイエス様に対する愛、神様に対する愛は、私たちの目の前にいる人たちを、私たちがどのように仕え、どのように受け入れ、どのように愛するかによって測られるということです。

私たちは、自己中心的な性質を持っているので、なかなか喜んで人に仕えることができません。自分よりも他の人のことを考えて奉仕すること、人の弱さや汚い部分を受け止めることは時には辛いものです。しかし私たちがもし、自分が仕えるべき人の内に、イエス様を見ていくなら、少しは頑張れるのではないのでしょうか。私たちの足を洗い、私たちの弱さも汚い部分も十字架によって受け止めてくださったイエス様を、その人の内に見て、イエス様に仕えるようにその人に仕えるなら、少しは喜びも生まれてくるのではないのでしょうか。

おわりに

イエス様は私たちに、互いに仕え合うことを願っておられます。でもそれは、私たちがまず、イエス様に仕えてもらうこと、私たちに対するイエス様の十字架の奉仕を素直に受け入れることから始まります。力を抜いて、イエス様に自分を委ねていく時、私たちの人間関係も変えられていきます。孤独から信頼へ、依存から自立へ、自己中心から愛へと変えられていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人間関係の多くは、問題を抱えています。その根本的な原因は、私たち一人ひとりのうちにある罪にあります。アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、すべての人間関係に問題が生じました。皆が自己中心の性質を持つようになったからです。そして、自分の弱さを互いに隠すようになりました。私たちの人間関係は、孤独や依存、支配の関係となりました。しかし、あなたが遣わされた御子イエス様は、私たちのすべての罪を洗い流すために十字架に架かり、互いに仕え合うように、互いに愛し合うようにと、私たちの壊れた人間関係を回復しようとされました。私たちがまず、イエス様の十字架

の奉仕を、まず受け入れることができますように。あなたにすべてをさげ出して、あなたに受け入れられている確信を持つことができますように。そして、私たちも互いに、愛し愛される関係、受け入れ、受け入れられる関係を築いていけますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。